



フランス国民 会議議長一行 来校

九月十八日(土)
午後、フランス国民
議会(下院)議長

ロラン・ファビウス氏率いる十八名が来校し、本校の高校生を中心とする一三〇名以上が集まっている四階大会議室で、意見交換が行われた。一行の訪日はその三日前で、超過密なスケジュールの中、日本の高校生の意識と考えの一端を知る目的で本校を訪れた。討論形式を当初予定していたが、一時間という時間枠では、ままならず、本校生の提出する質問に、ファビウス氏が答えるという形になった。ナシヨナリズムと世界、そのゆくえ というテーマに沿って、生徒の質問は「仏国でのアルジェリア人労働者及びムスリムへの差別の問題」、「核保有



国から見た日本の非核三原則をどう思うか」、「日本は国旗国歌法制化で議論が噴出したが、仏国歌ラ・マルセイエズは軍歌であることに疑問を感じないのか」、「青少年のいじめ問題や犯罪などはどうなっているのか」等々多彩かつ本質的なものであった。氏は丁寧にもまたわかりやすく説明した。生徒たちは静粛で真摯であった。このような機会を仏国要人と共有できたことは、本校生の幸せと言うべきであり、仏大使館を初めとした仏国民議会の方々に深く感謝する次第である。一行はちょうど運動会実行委員会の生徒が販売していたTシャツを買い求めるなど、その親しみ深い人柄を垣間見せてくれた。

寧波中等専門学校との 交流深まる

寧波市から中

昨年八月、中国寧波市から中等専門学校の一行が初めて来校し、国際交流の新たな波動を報告したが、その後、今年三月、我が校から高校二年生を中心に九名の生徒と三名の教員が寧波を訪れた。そしてこの八月十七日(火)再び寧波からの友を迎えたのである。訪問団は生徒十名、副校長以下通訳を含め六名、極暑の中、三時半過ぎに本校相模湖記念室に到着した。実はこの日、本校側の二〇数名は朝八時四



〇分に参宮橋に集合したのであった。東京見物、これが本校国際交流委員会の先生方の発案で計画された午前中の歓迎の行事であった。訪問団一行の宿舎で合流し、浅草雷門へ、そして東京湾水上バスで浜松町まで小さな船旅を楽しんだ後、東京タワーに登り、東京の街を眺望し、その足で本校を訪ねたのである。ハードなスケジュールにも関わらず、皆元氣一杯であった。根岸校長の、日中両国の互いの理解を深め、両校の絆を深めることの大切さ、更に互いにより視野を広げたい旨の挨拶の後、訪問団の副校長の挨拶、両校生徒代表の挨拶交換など、和気調達の雰囲気盛り上がった。高三斉藤真弘君の司会と乾杯の音頭でジュースを飲み、談笑へと移った。

茅陽一氏母校で授業

六月三日(木)東京大学教授を経て現在慶応大学・大学院でシステム工学を専門として教鞭を採っている茅陽一氏(昭二八卒)が本校高校一年生を対象にシステム工学の授業を行った。

システム工学は、総合科学である、という主題を軸に高校生には馴染みの薄い学問の世界を、OHP(オーヴァーヘッドプロジェクター)を使って、わかりやすく説明した。茅氏は母校で話すこと、高校生に向けて授業ができることに大いに期待し楽しみにして来校されたのだったが、一時間の授業の中では、生徒からの質問は少なく、茅氏は少々物足りなさを感じたことであろう。しかし、「エネルギー環境問題」が「システム工学」と密接に関係していることを幾つかの例を掲げて、懇切に解説し終わり、茅氏は、最後に「授業は先生と生徒との闘いだ」で結んだ。

文化祭そしてプール

五月三日から五日まで第五一回文化祭が盛大に催された。展示の内容も多彩で、中一から高三まで生徒達の授業中にはない朗かい姿が校舎内を活発に往き来していた。学外者も多数来校し(延べ人数一万八千人)、廊下も展示教室も混雑を極めた。

今年、例年の文化祭と大きく変わった事柄が一つ、特記すべき点としてあった。それは最終日の後夜祭の後の「プール」の件である。昨年まで常に教員側の頭を悩ませてきたのが、文化祭実行委員を中心とした「プール飛び込み」のフィナーレであった。これには危険が伴う。年間行事の中で最大のイベントである文化祭を成功させるための生徒達の長期に亘る真剣な努力は想像に余りあり、最終日の「プール」をもって、文化祭の終わりを飾りたいという気持ちの痛い程理解できるからであった。

今年、文実委員長の古澤祐介君らが中心となり、度重なる生徒同士の話し合いの結果として「プール飛び込み」が取り止めとなった。この結果と経緯は、四月二十七日付で、「プールに関する会議の詳細」として古澤君の名で全校生徒に配布された。そこからは、話し合いの過程で生徒達が悩み迷い逡巡している様子が顕わにされ、「麻布」の将来に向けて深く考えていることまでも読みとれる。「フィナーレ飾るのはプール飛び込みだけではない」との全会一致の結論の末、プールに代わる「文実委員全員の胴上げをする」ことで三日間の幕を閉じることに決まったのであった。(廣瀬)